様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０２４４３

研究課題名（和文）乳幼児期から学童期のふざけ・からかい行動の解釈を決定づける要因と発達的意義

研究課題名（英文）Factors and developmental significance that determine the interpretation of playfulness and teasing behavior from infancy to school age

研究代表者
小野　啓子（ONO, Keiko）

愛媛大学・教育学部・研究員

研究者番号：４０８０４１５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，ふざけ・からかい行動の発達的意義と，行動の解釈を決定づける要因について検討を行った。乳幼児期のエピソードの分析からは，表象機能の発達との関連や，自己と他者の分化との関連が示唆された。親密な他者との間でメタメッセージ含んだ複雑なやり取りを繰り返す様子は，社会的相互作用の発達の観点からも意義深い。行動の解釈を決定づける要因は，学童期のエピソードの分析より，受け手の心理的余裕，遊戯的サイン（表情，口調等），行為そのものの受容の可否，当事者の関係性，が挙げられた。アンケートでは，内面と遊戯的サインが同時に言及されることは少なかった。解釈を決定づける要因の個人的背景も興味深い。

研究成果の学術的意義や社会的意義
乳幼児期に，親密な他者との間でふざけ・からかい行動を通してメタメッセージを含んだ複雑なやり取りを繰り返すことは，表象能力や自己と他者の分化，社会的相互作用の発達の基盤となっていることが明らかになった。子どもたちのありのままのコミュニケーションの様相を探るための一助となると思われる。また，その発達的意義に鑑みて，ふざけ・からかい行動への大人の側の関わり方を見つめなおす必要性についても提言したい。ふざけ・からかい行動の解釈を決定づける際の要因については，内面と遊戯的サイン（表情，口調等）が同時に言及されることは少なく，解釈を決定づける際の個人的な背景も興味深い。

研究成果の概要（英文）：In this study, we investigated the developmental significance of playful and teasing behaviors and the factors that determine their interpretation. Analysis of episodes in infancy suggested a link to the development of representational function and a link between self and the differentiation of others. Repeating complex exchanges, including meta-messages, with intimate others is significant from the perspective of developing social interactions. From the analysis of episodes in school age, the factors that determine the interpretation of behavior were the psychological margin of the recipient, playful signs (facial expressions, tone, etc.), acceptance of the behavior itself, and the relationship between the parties. In the questionnaire, it was rare that the inner side and the playful sign were mentioned at the same time. The personal background of the factors that determine the interpretation is also interesting.

研究分野：子ども学および保育学関連

キーワード：ふざけ・からかい行動　メタ表象能力　自己理解　他者理解　メタメッセージ　コミュニケーション行動　折り合い

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ふざけやからかいといった行動は，生活場面で日常的に観察される行動である。「親しい他者や親しくなりたい他者の感情に影響を与えようとする意図的な行為（Reddy,V.1991, 2008/2015）」とされ，他者との関係性の変化に影響を与えるものである。他者の心を認知的に推論できるようになるのは，4，5 歳とされているが，1 歳前後の乳幼児が，母親の示したポジティブなふざけ・からかい行動を遊戯的に解釈して楽しむ様子は，以前から報告されている（Redy,V.1991）。その際には，「情動共有」というファクターが，他者理解の促進に影響を与えているとして注目されている。一方で，ふざけ・からかい行動は，ネガティブに捉えられる側面もあり，コミュニケーション行動としての十分な検討がなされていなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は，ふざけ・からかい行動をコミュニケーション行動の一様式として捉えなおし，乳幼児期から継続してふざけ・からかい行動の受容と表出の過程を追い，これらの行動の楽しみ方の発達的変化について検討し，その発達的意義について考察を行うことである。

また，受け手の側が，遊戯的サインに込められたメタメッセージを捉える背景について検討することで，ふざけ・からかい行動の解釈を決定づける要因についての考察を行うことである。

３．研究の方法

(1)乳幼児期の養育者との生活場面の縦断的観察；対象者：A 児（男児 1 名）実施期間：2 歳 2 ヶ月～4 歳 8 ヶ月（1 歳 8 ヶ月～2 歳 1 か月については，育児記録より情報をいただく）手続き：養育者との日常生活場面をビデオで撮影する（2～3 回程度/月；60 分～120 分/月），本研究のふざけ・からかい行動の定義にあてはまるエピソードを抽出し，詳細に書き起こした後，プロトコル分析（発話分析）を行う。学童期の日常生活場面での観察：対象者：放課後等デイサービスに通う小学校 1 年生～5 年生（男児 4 名，女児 1 名）実施期間：3 ヶ月：手続き：遊び場面をビデオで撮影し，同様にエピソードを書き起こす（1 回程度/週；60 分/1 回），グラウンデット・セオリー・アプローチの手法を参考に，対人コミュニケーション場面における機能と，行動の解釈を決定づける要因について簡潔なことばでラベリングを行なう。

(2)アンケート調査：

実際のふざけ行動のエピソードを基に作成した 4 コマの紙芝居を作成し，個別・対面にて実施。その後，エピソードの受け手の側の気持ちを 4 択で質問。さらに，なぜそのように判断したのかについて記述式で応答を求める。対象者：20 歳代から 70 歳代までの男女 35 名。

４．研究成果

(1)乳幼児期の養育者との生活場面の縦断的観察：2～4 歳期の総録画時間は 33 時間 40 分，1 歳 8 ヶ月～2 歳 1 か月の育児記録からのエピソードを合わせた総エピソード数は 19(図 1:Ep. 1～19)，エピソードの総録画時間数は 47 分であった。一つのエピソードの中に多くのユニット（ふざけ行動の最小単位）を含むものも観られた。プロトコル分析からは，これらの行動が，表象機能の発達や，自己理解，他者理解の発達，社会性の発達の一助となっている様子が伺えた。

①1～2 歳期の観察記録からは，1 歳 8 ヶ月頃に養育者の遊戯的サインがうまく読み取れずに困惑する様子が見られたが，1 歳 10 ヶ月頃には同様のエピソードにおいて，大人の遊戯的意図を読み取り，やり取りの楽しさを共有できるようになっていた。その後，1 歳 11 ヶ月頃に対象児自らが，主体的にふざけ・からかい行動を発信する様子が観察された。これと同時期に，対象児には母親の掃除の様子などを真似た日常的行為のふりが盛んに観られるようになり，他者の行為の表象化が急速に進んでいること

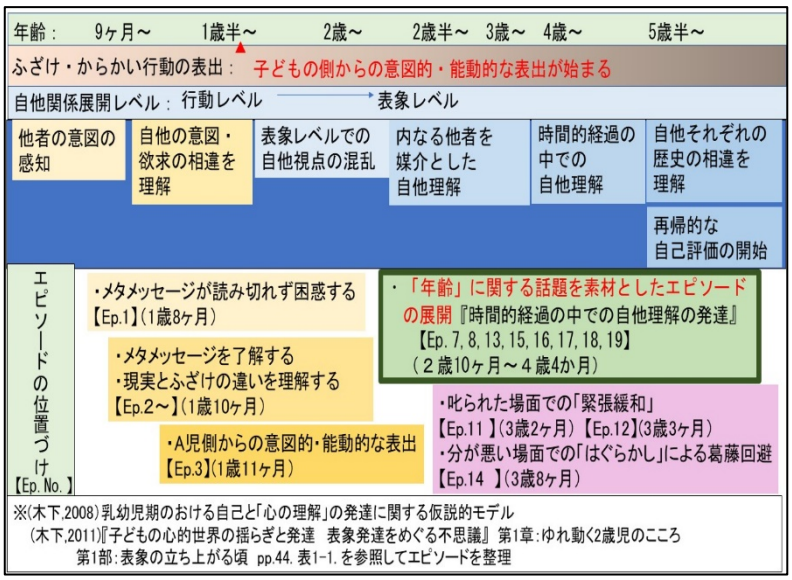

図１．自他関係展開レベルに基づく乳幼児期のふざけ・からかい行動のエピソードの位置づけ

が伺えた。ふざけ・からかい行動の能動的な表出には，「プレイフルという新たな表象をつくりだしている自己への気づき」（小山，2012）や，表象機能の発達による自己と他者の分化の促進があるものと推察された。

②3 歳期には，自身の分が悪い場面で，ポジティブな情動を共有しつつ，葛藤をうまく回避しようとする「はぐらかし」の機能が出現した。「自分の言動によって，相手の気持ちがポジティブに動くであろう」ことを理解しており，「自分が無理筋の主張をしている」ことも理解している上でのメタメッセージを含んだ複雑で持続的なやり取りでは，自己と他者の内面を同時に表象できており，自己理解と他者理解が同時に相補的に進行している様子が伺えた。

堀越(2016)では，4 歳期に入ると，少し高次の機能を持ったふざけ行動が増加し，拒否などのネガティブな場面で「緊張緩和」のふざけで対処するようになるとされているが，3 歳児どうしの間では，いざこざの場面での緊張緩和にふざけを用いることは少ないと報告されている。

本研究で見られた 3 歳期の幼児の「はぐらかし」のふざけ行動は，ある程度受容的に対応してもらえる養育者などの親密な他者との関係性の中で，ポジティブな情動共有の状態から「はぐらかし」という行動でのやり取りを繰り返し，自分の行動によって，他者の心的状態がどのように変化するかを試していると考えられる。そして，それらの行動は，後の同世代の仲間間でのネガティブな状態を緩和するための「緊張緩和」という行動の基盤になっているのではないかと推察された。

③2～4 歳期に継続的に観察された「年齢」を素材としたエピソードの分析では，当初は対象児にとって順序性のあるただのラベルにしか過ぎなかった「年齢」が，次第に「年齢相応の期待」を伴う，時間的経過の中で変化する連続的なものとして表象される様子が観察された。4 歳期に入ると，母親からの年齢相応以上の行動への期待を冷静に能動的にはぐらかす様子が観られ，今現在の 4 歳という自己を能動的に主張していた。このエピソードの発端は，対象児が 2 歳 10 ヶ月の時の偶発的なふざけ行動に対する，予想外の養育者のポジティブな応答であった。その後，他の親密な他者との間でも次第にフォーマットのある楽しいやり取りとなり，様々なヴァリエーションを加えて継続的に繰り返されることとなった。

木下(2005，2008)は，時間的拡張自己（時間的に連続的にかつ統一的に存在する主体としての自己）の発達基盤として，メタ表象能力，社会的相互作用，大人の“足場”かけを挙げている。幼児期の日常的なふざけ行動の，メタ表象能力の発達基盤としての側面，社会性の発達の一助として側面を改めて問い直し，子どもの行動に対する大人の側の対応を見つめなおしてみる必要があると思われる。

(2)学童期のふざけ・からかい行動の観察：総録画時間数は 9 時間 36 分，総エピソード数は 15。一つ一つのエピソードの中に多くのユニット（ふざけ行動の最小単位）を含むものも観られた。対人コミュニケーション場面での機能については以下の 4 つが挙げられた（表 1）。受け手の側が，ふざけ行動の解釈を決定づける要因については，以下の 3 つが挙げられた（表２）。

表1：学童期のふざけ・からかい行動の対人コミュニケーション場面における機能

機能	概要
楽しさの共有	周りを巻き込む，ふざけへの同調，ふざけ行動の伝染
メタメッセージの発信	承認や注目への欲求をメタメッセージとして発信
場を和ませる（緊張緩和）	他児との緊張状態の緩和を目的としたふざけ行動
相手を試す	相手の反応への期待，相手の許容範囲を試す

表2：学童期のふざけ・からかい行動の解釈を決定づける要因

要因	概要
受け手の側の心理的余裕	挑発的な遊戯的サインを含んだふざけ行動に対して，心理的余裕の違いによって受け手の応答が異なる
行為そのものの受容の可否	ポジティブな遊戯的サインを伴っていても，受け手側に行為そのものへの嫌悪感がある場合，ふざけ行動を受け入れらない（例：他者に向けて物を投げる行為への嫌悪感）
当事者同士の関係性	ふざけ行動を通して，二者間の関係を推し量る（例：同じふざけ行動を繰り返し許容範囲を試す，故意にルールを破ってお試し行動をする）

大人の側は，子ども達の行動の背景にある本来の意図をくみ取ろうとする意識を持ち続けていくことが大切である。また，受け取ったメタメッセージに対してどのように応答していくのかも問われる。今回の観察場面では，ふざけ行動が繰り返されると，大人は，場面の切り替えや，新たな活動の提案，やんわりと注意を促す，といった，子どもの側から発信されたふざけ行動を終了させたり，一連のふざけ行動に流れにひと区切りつけようとしたりする方向性を持った対応を行っていた。

図２．紙芝居「たろうくんとはなこちゃん」　新川（2017）

(3)紙芝居を用いたふざけ・からかい行動の解釈に関するアンケート調査：
実際のエピソードに基づいた4コマの紙芝居(図2)を実施し，ふざけ行動の受け手の気持ちについて，「楽しい」「びっくり」「怒っている」「わからない」の 4 つの選択肢から選択（複数回答可)。そして，「なぜそう思ったのか」，「あなたが受け手であったらどんな気持ちか」について記述式で回答してもらった。
回答者 35 名の内訳は，

20 代：10 名（男性１名，女性９名）　30 代：9 名（男性４名，女性５名）
40 代：７名（男性１名，女性６名）　50 代：6 名（男性０名，女性６名）
60 代：２名（男性２名，女性０名）　70 代：1 名（男性０名，女性１名)。

選択肢の回答率は 100%で，内訳は，「楽しい」20%，「びっくり」43%，「怒っている」26%，「わからない」0%，複数選択されたものは「楽しい・びっくり」3%，「びっくり，怒っている」が８%であった。

記述式の回答については，以下のように数値化した。Ⅰ：「受け手の気持ちにについてなぜそう思ったのか」の問いに関しては，Ⅰ-1:「記述回答の無(0)有(1)」Ⅰ-2:「受け手の気持ちに言及した記述の無(0)有(1)」Ⅰ-3:「受け手の表情（笑顔）への言及の無(0)有(1)」。

Ⅱ:「あなたが受け手であったらどんな気持ちか」の問いに関しては，Ⅱ-1:「記述回答の無(0)有(1)」Ⅱ-2:「怒り，不満，疑問，等のネガティブ感情の記述の無(0)有(1)」Ⅱ-3:「意見，要望，新たな対応等の前向きな記述の無(0)有(1)」。以上の 6 項目に「性別：男性(1)女性(2)」，「年齢:30 代以下(1)と 40 代以上(2)」「4 択問題の選択肢：楽しい(1)，びっくり(2)，怒っている(3)，楽しい・びっくり(4)，びっくり・怒っている(5)，わからない(6)」の 3 項目を加えて，自動集計検定 2×2(js-STAR)を実施し，統計的に有意な 2×2 表を得た（表 1～3)。

表3．はなこちゃんの気持ちへの言及の有無　と　表情の選択肢

	はなこちゃんの気持ちへの言及 無	有
表情の選択肢	6	1
1：楽しい		
2～5：楽しい以外	8	20

p=0.010（両側確率）
P=0.010（片側確率）
Phi=0.467

表4．はなこちゃんの表情（笑顔）への言及の有無　と　表情の選択肢

	はなこちゃんの表情（笑顔）への言及 無	有
表情の選択肢		
1：楽しい 2：びっくり	15	7
3：怒る 4：楽しい・びっくり 5：びっくり・怒る	13	0

p=0.031（両側確率）
p=0.025（片側確率）
Phi=0.384

表5・はなこちゃんの表情（笑顔）への言及の有無
と　はなこちゃんの気持ちへの言及の有無

	はなこちゃんの表情（笑顔）への言及の有無 無	有
はなこちゃんの気持ちへの言及の有無		
無	8	6
有	20	1

p=0.010（両側確率）
p=0.010（片側確率）
Phi=0.467

紙芝居の受け手（はなこちゃん）の気持ちに言及している人は，「楽しい」以外の選択肢を選ぶ傾向がある（表 3)。受け手の表情（笑顔）に言及している人は，「楽しい」「びっくり」を選択し，「怒る」を含む選択肢は選ばない傾向がある（表 4)。一方で，受け手の気持ちと笑顔の両方に言及している人は少なく，受け手の気持ちに言及している人は，受け手の表情には言及しない傾向がある（表 5)。受け手の気持ちにも表情にも言及していない人は，「目の前で，急に，積み木を倒された」という事実に言及していた。紙芝居によるアンケートの結果からは，受け

手の気持ちを判断する際，判断の根拠として「受け手の内面への言及」「遊戯的サイン（表情，口調等）への言及」「目の前で起こった事実そのものへの言及」の 3 つの側面が挙げられた。それぞれの側面を判断の根拠とする個人的背景についても興味深く，さらなる調査を検討したい。

＜引用文献＞

①堀越紀香(2016) 幼児における「ふざけ行動」の意義,白梅学園大学大学院子ども学研究科博士課程，2016 年度　学位論文.

②古谷那瑠美・小野啓子(2020)乳幼児期のふざけ行動がコミュニケーション行動として成り立つ背景　愛媛大学教育実践総合センター紀要　第 38 号

③木下孝司(2005)幼児期のおける時間的拡張自己と「心の理論」心理科学第 25(1)，58-72.

④木下孝司(2008)乳幼児期における自己と「心の理解」の発達　ナカニシヤ出版

⑤小山正(2012) 初期象徴遊びの発達的意義.特殊教育学研究,50(4),363-372.

⑥Reddy,V.(1991) Playing with others' expectations: Teasing and mucking about in the first year. In A. Whiten (Ed.) Natural theories of mind(pp.143-158). Oxford: Blackwell.

⑦Reddy,V.(2008/2015) How infants know mind? Harvard University Press.
レディ,V.著　佐伯胖訳　(2015)『驚くべき乳幼児の心の世界』 ミネルヴァ書房

⑧新川拓弥(2017) 対人コミュニケーション場面におけるふざけ・からかい行動解釈と役割について．愛媛大学教育学部 2017 年度　卒業研究.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 古谷那瑠美，小野啓子	４．巻 38
２．論文標題 乳幼児期のふざけ・からかい行動がコミュニケーション行動として成り立つ背景ー乳幼児と養育者の日常的関わりにおけるエピソードの分析ー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 愛媛大学教育総合実践センター研究紀要	６．最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小野啓子,古谷那瑠美,髙橋明里,渡部公香,花熊暁
２．発表標題 ふざけ・からかい行動の発達的意義に関する研究（２）～３歳期のふざけ・からかい行動に見られる他者理解と自己理解～
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 小野啓子
２．発表標題 ふざけ・からかい行動の発達的意義に関する研究（１）-1～2歳期のふざけ・からかい行動の受容と表出ー
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小野啓子
２．発表標題 ふざけ・からかい行動の発達的意義に関する研究（3）-2～4歳期の「年齢」を素材としたエピソードに見る主体の育ち-
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	花熊暁　暁 (HANAKUMA　Satoru) (60172946)	関西国際大学・教育学部・教授 (34526)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関